

～ 釜 石 の 戦 時 体 制 ～

釜石を表現する言葉に「鉄と魚の町」という言葉があります。その言葉の通り、明治から昭和にかけて、釜石町は製鐵所の事業拡張と水産業の発達から急速に発展していました。

大正から昭和初期まで続いた経済危機のため、鉄鋼業界も不況にあえいでいましたが、満州事変以降再び鉄の需要が拡大すると好況に転じます。

日本が戦時体制を強めていく中、鉄の安定した供給が求められるようになり、官営八幡製鐵と釜石製鐵所も含む民営の製鐵所が合同し、昭和9年2月1日、日本製鐵株式会社が設立されました。

昭和10年に入ると人口も3万人を越え、市制施行が望まれるようになり、昭和12年5月5日、岩手県では盛岡市について2番目に市制を施行し、『釜石市』となりました（当時の世帯数：7,700戸、総人口：40,388人）。

釜石製鐵所も拡張計画が進められ、構内にあった社宅街を中妻、小佐野・小川地区へ移転して工場用地を広げ、昭和13年には第10高炉竣工火入れ、同15年には日産400トンの大型工場が始業するなど設備・生産の増強が図られました。

日本が軍事色を強めていく中、市民生活も戦時色一色となっていました。

昭和16頃から米やみそ・しょうゆなどの食糧、衣類などの生活必需品が配給制になり、男性は坊主頭に国民服・巻脚絆姿が、女性はひつつめ頭にして和服を改造した標準服にもんぺ姿が一般的になっていきました。

そして昭和16年12月8日、日本は太平洋戦争に突入していきました。



市制施行を祝う行列



防空演習の様子